

自主シンポジウム 15

環境構成=再構成への実践的アプローチ
——環境づくりへの構想力と現場実践

企画者 : 汐見 稔幸 (東京大学教育学部、臨床育児保育研究会)
 司会者 : 塩野谷 斉 (臨床育児・保育研究会)
 刑部 育子 (公立はこだて未来大学)
 話題提供者 : 仙田 満 (東京工業大学)
 佐々木正人 (東京大学教育学部)
 中瀬 泰子 (おおぎ第二保育園園長、臨床育児保育研究会)
 田中 泰行 (向南幼稚園園長)
 指定討論者 : 汐見 稔幸

企画趣旨 ◆ 汐見稔幸

保育において環境構成の果たす役割の重要性が指摘されるようになって久しい。その背景には、実際の生活環境が都市化、人工化、情報化、あるいは人間関係の狭隘化や時間の私物化などと形容される方向に変化し、子どもたちが自由に、自分たちで、時間を気にせずに、環境と交渉しながら意味ある世界を作り出していくことが難しくなってきたという事実がある。そのために、環境を子どもたちの創意性のある行動を誘発しない類のものから、子どもたち自身の行動をうまく、多様に引き出すものに変えていくことが重要であるという認識が生まれている。

保育において環境の持つ意味の重要性が自覚されるようになってきた背景には、もうひとつ、人間の行動は環境や状況の刺激と無関係には起こりえないことが、具体的にわかってきたという事実もある。

この十年ほど、保育の現場でも環境構成の工夫がそれなりに積み重ねられてきた。しかし、現場の最先端では、育児・保育の中で具体的に環境がどれほど大事なのか、何を持って環境というのか、環境を創り出していくとは具体的にどういうことか、等ということは、必ずしも明確になっていない。

そこで本シンポジウムでは、保育における環境の意味、保育目標と環境構成の関係、環境を創造するということの中身等を、今日の子どもの発達状況と関わらせ、また現場の立場から、明らかにすることを目指したい。端的に、現場の人間が、具体的に環境づくりを工夫するにはどうすればよいのかということが多方面から考えあおうということである。

話題提供者 提案要旨

◆ 仙田 満 空間と子どもの相互関係

環境と子どもの相互関係を論ずるのだが、ここでは環境というフィールドを主に物的な環境に限定したいと考える。そこで少し狭い意味なのだが、環境を空間という言葉に置き換えている。ここでは空間はハードな環境という意味において、空間的環境のみではなく、物的環境も含む事とする。

＜空間が子どもを変える＞

空間が子ども達を変える力がある。よい空間は子ども達を育てる。さまざまな活動を引き起こす。子ども達に働きかける。かつて遊具研究から子ども達があそびやすい空間の構造として＜遊環構造＞を提案した。それは集団あそびが発生しやすい空間の構造であった。遊環構造は次の7つの要素をもつものである。

①循環機能があること、②その循環(道)が安全で変化に富んでいること、③その中に、シンボル性の高い空間、場があること、④その循環に“めまい”を体

験できる部分があること、⑤近道(ショートサーキット)ができること、⑥循環に広場がとり付いていること、⑦全体がポーラスな空間で構成されていること。幼児施設における子ども達の滞留行動の研究から、子ども達のお気に入りの場所として3つの場をあげた。＜陰所＞＜高所＞＜別所＞である。あそび場の研究から子ども達のあそびの6つの原空間を提案している。＜自然スペース＞＜オープンスペース＞＜道スペース＞＜アナーキスペース＞＜アジトスペース＞＜遊具スペース＞である。日本の住宅における子どものあそび場の研究から4つの場をもつ住宅、すなわち＜かくれ場＞＜工作場＞＜運動場＞＜劇場＞としての住宅を提案した。

子どもの行動を変える空間の性格を、子どもの様々なあそびと生活の行動から次の5つにまとめた。①柔らかさー柔軟性、②変化ー多様性、③想像ー豊かなイメージを喚起できる、④多孔質ーポーラス、出入りが自由、⑤運動ー連動性がある

＜子どもが空間を変える＞

子ども達が自分でその環境を形成する力を養いたい。潜在的に子ども達はそのような能力を持っているのである。空間を変える。利用する。つくる。想像する。自分の空間をつくる事によって想像力と創造力を鍛える。与えられるのではなく、自分たちでつくれるのだという事を体験させる。体験する事が必要。そうする事によって子ども達はその能力を更に伸ばしていく事ができる。

◆ 佐々木正人 無知の共有

行為から見える環境というのがある。たとえば机上の食卓に並んでいる食べ物。私は数家族にお願いして、それらが口に運ばれる順序を3年間(1～4歳)縦断的に観察したことがある。大きな変化の一つは、多種の食物の口に入れられる系列にリズムが生じたということであった。4歳頃に、餃子→白飯→酔物の物→白飯→餃子のような白飯を媒介とした多種のおかずを渡り行く成熟した順序があらわれた。それがあらわれるまでは同一の食べ物が食べ続けられ、それに飽きると他に移るという風であった。食卓上の多種の食物を、行為はそれらが混合してできる味として「見ている」ことがわかった。静止してある食物が混ぜりできる味をつくり出すことが食卓上の行為の働きであることを知った。ただしこの種のリズムはどの家族でもあらわれたわけではない。それは親が用意する献立に依存して生じた。4歳までの観察では、この種のリズムは白飯と数種のおかずを毎晩用意した家庭の子どもにあらわれ、他にはあらわれなかった。

行為は何かに取り囲まれている。行為を取り囲む

ことを環境とよぶ。環境はわかるようでわからない。私たちは物についてよく知っていると思っている。食物についても、栄養学、しつけ、健康（添加物）などの観点で議論することができる。どれも重要である。しかし行為にある種の選択を強いる食物群の配列がもつ意味ということになると、それは行為に起こることを長く観察してみなくてはわからない。この予想して語ることの困難なことが、環境の核心にあるリアルである。

行為から環境をみてきた経験からすると、環境を語る時にもっとも重要なことは「知らないことを知らないこととして」議論することであるように思える。行為は環境を既知のようにしては振る舞わない。行為は環境を知らないこととして丁寧に時間をかけて扱う。この行為のプラグマテックな性質に私たちの環境をめぐる議論も習うべきである。環境を話題にするということは、環境にまだ知らないことがあるということを知り、それを子どもとともに探知すること、すなわち無知を共有することだと主張したい。（参考：拙著『知性はどこに生まれるか』講談社現代新書）

◆ 中瀬 泰子

子どもの育つ環境

埼玉県入間市の市街地にある保育園、園舎は築20年の木造、開設当時は雑木林に囲まれた自然の多い環境だったが、いつのまにか四方を高層住宅やデパートが林立し、なんとも味気ない保育園に変貌してしまい保育への希望まで失いかけていたところ北欧の保育を学び、保育園（ダークヘム）昼間の家庭を見学する機会に恵まれた。

起伏や樹木を利用した自然そのままの庭、緑に囲まれた平屋の木造づくり、ちょっと大きめの普通の家という感じ、園舎内の環境も美しいデザインのカーテン、観葉植物などのセンスのよさに驚くばかりだった。なんと自由で豊かな生活空間、わが園の現状を思うと、あの日当たりの悪い平面の園庭を何とかしなくては・・・園舎の前に立ちだかっている駐車場約200坪のうち、100坪の地面を切り開き樹木を植え、芝生や草花、特に実のなる木をたくさん植えた。砂場の枠を太い丸太で組み、大人が腰掛けられるようにした。これは地域の子育て中の親に好評で子どもの遊びを見守りながら、子育て仲間とおしゃべりができる交流の場にもなっている。また、幅の広い滑り台を設置し、これはスウェーデンで見た保育園の環境を取り入れてみた。

今では以前の保育園が想像できないほど緑豊かな自然いっぱい園庭に生まれ変わった。小鳥たちは果実をついばみにやってきます。ちょうちょやトンボも市街地であることを忘れたかのようにどこからともなく飛んできて、小さな子どもたちを喜ばせてくれます。果実の収穫期には、柿の実やぶどう、みかんなどをほうばり、すっぱい味、苦い味にもいつしか慣れて食事のメニューでは酢の物が好きな子どもたち、小さな園庭だが地域の人たちや、子育て中の親にとっては緑のオアシスになっています。ここまでくるのは約10年かかりました。園内の環境についても、保育室を落ち着いた雰囲気にするために紙の造形から布でパッチワークやタペストリーに替えカーテンの工夫であたたかな生活空間に子どもたちの遊びも室内での遊びと外での遊びでのちがいがみえてきた。室内では人形遊びコーナー、絵本コ

ーナーなど遊びのコーナーを工夫し、じっくりとひとつの遊びを楽しめるようになってきた。また、子どもから見た保育室内の高さや視界に注目してテーブルやイスの高さ、ロッカーなどの間仕切りは、子どもからは周囲が見えにくく大人からは部屋全体を見渡せる高さ（約60センチ）にする。特に乳児の場合は床で生活することが多く、保育士の忙しく立ち働く足元にいるためか落ち着かず不安定な様子が見えた。そこで、乳児の保育室にモニターを取り付け担当保育士の行動を、色別に分け動線を記録し子どもにとってどうであったか話し合い、大いに反省するところであった。

乳児室の増築の際、広いワンルームを4つの生活ゾーンに分けた。寝る場、遊ぶ場、食べる場、衛生空間（おむつ交換、沐浴、手洗い）の4つの場である。それぞれの保育士が必要に応じたゾーンで子どものケアをしたり、遊び相手になるなど子どもの欲求を十分に満たせる場所があることで保育者への後追いなどの泣きがなくなり、やわらかなほほえみが多くみられるようになった。保育者もゆったりと落ち着いて子どもに対応ができるなど、子どもにとっても、保育者にとってもよい結果がでました。

保育園の環境には人的環境、物的環境、自然や社会の事象などがあります。それぞれが相互に関連しあってよい環境をつくりだすのだと思いますが、特に年齢が低い子どもにとっては環境は心と身体の栄養です。子どもの生活が安定し豊かな活動ができるよう、工夫や努力をすることが保育士にとってこれからの課題だと思います。

◆ 田中泰行

隅・物陰・裏など幼児が好

んで使う小空間をめぐる

園生活の中で幼児に人気のある遊び空間として、園舎の裏、隅、物陰また植え込みの中など、囲い込まれたり周囲から隔離したりした小さな場所がある。ここでは幼児同士が少人数で、互いに意思を交換しながら自分達の思いを実現している姿に出会うことが多い。

他方広い園庭は伝承的な遊びや縄跳び、ボール遊びやリレーなど比較的多数で一定の既存のルールの下で遊ぶ、いわゆる集団遊びなどによって占められる傾向がある。

どちらの遊びも幼児の発達を支える経験として欠かせないものではあるが、広い園庭での遊びはその変化や発展が教師にとっては比較的予想し、見通しやすいのに対して、小空間での遊びは偶発的であったり間欠的であったりすることが多く、指導計画や生活プランの中に位置づけるのが困難であり、どのように援助してよいか戸惑うことが多いように思われる。

しかしかつては地域の中で、仲よし同士によって日々楽しまれていたこうした幼児同士の親しみの籠もった意思交換、濃密な人間関係は現在なお一層重要ではないだろうか。

そこで園内におけるこうした小さな遊び空間に注目して、そこで展開される遊びの内容や展開を観察し、また幼児同士の会話なども収録しながら、こうした遊びを育てるためにどのような手立て、かかわりなどが必要なのかを探ってみたいと思う。